

中学校音楽科創作授業における 生徒間コミュニケーションの変容の要因

学籍番号 249330

氏 名 隅田 佳乃

主指導教員 兼平 佳枝

副指導教員 猿谷 紀郎

1. 背景

筆者がこれまで受けてきた音楽科授業や、教育実習や学校実習において観察した音楽科授業において、生徒間コミュニケーションが十分に見られなかった。このことから、筆者は、音楽科授業における生徒間コミュニケーションを軸に、創作分野の授業を実践した。そして、その録画記録を見た際、生徒間コミュニケーションに消極的であった生徒が、徐々に積極的になっていく様子が見られ、なぜこのように生徒間コミュニケーションが変容したのだろうかという疑問をもった。このような疑問を解決するため、筆者は、音楽科のコミュニケーションに関する先行研究の多くが依拠している、J. デューイのコミュニケーション概念に注目した。

以上より、本研究の目的は、中学校音楽科創作授業における生徒間コミュニケーションの変容の要因を明らかにすることである。研究の方法として、まず、一般的な事典や教育学関連事典、デューイのコミュニケーションに関する先行研究やデューイの著書をもとに、デューイにおけるコミュニケーションについて整理し、本研究におけるコミュニケーションの用語を規定する。次に、創作分野の研究授業を計画し、実践する。そして、用語の規定に基づき、生徒間コミュニケーションの変容の要因を分析する。最後に、結論を導出し、考察を述べる。

2. デューイにおけるコミュニケーション

まず、一般的な事典におけるコミュニケーションとは、社会生活を営む人間の間や動物どうしの間で、意思・知覚・感情・思考を伝達し合うことであり、教育学関連事典におけるコミュニケーションとは、人と人が意図をもって情報や思想、感情を共有しながら目的を遂行する社会的な行為であることがわかった。

次に、先行研究におけるデューイのコミュニケーションとは、共通の興味、共通の目的、行為の完成の予想、互いの立場に立つことを通した協同的行為、意味の共有という5つの特徴をもった行為であるということがわかった。これらのことを踏まえて、デューイの『民主主義と教育』と『経験と自然』を中心に、コミュニケーション概念に関する文献研究を行った。その結果、コミュニケーションとは、人々が意味を共有することであり、互いに、行為の完成を予想しつつ、相手の立場に立って分担して行動するということが重視されていることがわかった。そして、その際人々が共通の興味と共通の目的をもつことが条件として必要であるとされていた。

以上のことから、本研究において、デューイにおけるコミュニケーションを「人々が共通の興味と共通の目的をもち、行為の完成を予想して、互いの立場に立って分担して行動しながら、意味を共有していくこと」と規定することとした。

3. 研究授業の計画・実践・分析

筆者は、対象を中学校第2学年、単元名を「同時と追いかけのリズムの重なりを意識して、《俳句によるリズムアンサンブル》をつくって演奏しよう」とした研究授業を計画し、実践した。具体的に、生徒は、俳句の情景や俳句からのイメージがより伝わるように、3パート8小節の《俳句によるリズムアンサンブル》を4人班で1つ創作し、演奏することを目指した。

授業分析においては、生徒間コミュニケーションに顕著な変容が見られた松田を含む3班の生徒を抽出した。そして、本研究におけるコミュニケーションの規定に基づき、まず、抽出したa～dの4場面におけるコミュニケーションをそれぞれ分析した。そのための分析の視点は、ア) 班員の共通の興味は何か、イ) 班員の共通の目的は何か、ウ) 班員はどのように行為の完成を予想し、それに向けてどのように行動しているか、エ) 班員にどのような意味が共有されたかの4点である。次に、これらの視点で分析したことをもとに、それぞれの場面ごとの相を導出した。その結果、場面aでは、松田と他の班員間の共通の目的に差があり、松田は班での話し合いに参加していなかったため、意味が共有されたかどうか不明であった。それが、場面bでは、松田と他の班員間には共通の興味や共通の目的ができ、意味も共有されていくようになった。さらに、場面cで松田は他の班員の立場に立ち、他の班員の意見に、自分の意見を付加していくことができるようになった。その後、場面dで松田は、作品の完成のために、自ら自分の意見を提案することができていた。それだけでなく、松田が他の班員の意見に納得できない場合には、その班員の立場に立った上で、作品の完成に向けて自ら代替案を提案することができていた。以上のことを踏まえて、コミュニケーションの変容の要因を分析した。

4. 結論と考察

研究の結果、生徒間コミュニケーションの変容の要因は、①他者から受容されたことや、他者への貢献を実感したこと、②他者への貢献を実感したことによって、作品完成への意欲が喚起されたこと、③他者の立場に立った上で、共通の目的を実現するために自らの行動を調整したこと、の3点であるということが明らかになった。そして、以上の3点は並立しているのではなく、学習の展開に応じて段階的に重なっていくことで初めて、コミュニケーションを変容させる要因として機能すると考えられる。

生徒間コミュニケーションが変容していくにつれて、班内で共有されていた意味も、徐々に詳細になっていくということがわかった。しかし、コミュニケーションに消極的になった生徒もいた。その要因として、作品づくりをしたい俳句を班で1つ選ぶ際にその生徒が希望した俳句が選ばれず、希望の俳句で作品をつくることができなかったことがあるのではないだろうかと考えられる。